

小説道し鬼は苗穂叶

不打倒病院裏 中山氏才

八
四
三郎
様

片山二



東京や博多や近畿土の

うそちよみ

Y

四月
二十日

川 田



和仁

子 子



きかは便郵

東京日本技
ハ因三市本
本
本

父丈太郎儀永々病氣ノ如養生不
相叶本日午前十時三十分死去仕
候簡不敢御通知申上候
葬式義八明后十九日午后一
時途中葬列ヲ廢シ淨心寺へ小
石川白山前町一ニ於テ相當
可申候

東京市本郷區湯島天神町ノ三

大正八年四月十七日

井原保正

和子はお手の筋毛はけまつ中一けいやだ。うるさきを
かゆみます。汗をかくのはわざと多くする。また化粧水をかぶ
る。一昔の人は大やう恥う由をうなづいたります。
足をまといむすはれぬ心地をもつて、せんたく用ひえり。
わくわくするが、失れかばい中より強硬を取るがち。
皮膚の下は二度も背中、肉も二度も一度居りたがはれと人の
言ふことをうかがふ。隠かくして、かくそを痛めは千回
累々全く不意以上に尊敬が居ります。お風呂の間も
不順術一回中向うをかぶらかげども

日 月 年

No.

心配是格。通信簿を手にした。地図を手に持つ。傍
多居を下す橋の電線を留意を仰ぐ。他に言ひ得ず。あは
う。どうかがちを。あは風が吹く。雨が降る。夕刊を
う。駄馬の運賃を下す。各自の各自の一言を書く。其の後
是れは便り。ケル。三等だ。あやかへ達成。事やも竟
加害者。駄馬を自分で一安らか。宿主。三枚はう。承
之をかねば好んで済む。ひとと有りて。胸中。あはん
は。身弱。道地。腰を掛け。身中を押す。身を
うめき。困れる。宿主。大笑。おはり。下を押す。其他は。床。床
車。車を下す。身。おはり。中譯す。附近。おはり。宿主
一歩。おはり。宿主。井原丈太郎。死云。由。通。おはり。車

佛父上様

四三

仁子

墨字を用ひ薦葉の方の下さる所を読みて承り有り
乍らちうらゆかに於て御父様とおもふ御嬢姫と大
きな御子白いお母さん有りて沙子一束一束
持て大元氣の様子で歩く事中止無く沙子
お母ちうらゆか沙子の姿はあはれ走る事中止
まじまじやれお母いそし有りま、肌寒い日の如き有之
終て始は晴れ薄うる日が暮くゆる

先日は会ひておえんこへおまつあ見えずおめ新しくお
ひがはおゆみ

七十方の娘はお健は體もあらゆる處れ早起の様か教説を
お教へる事半ばおのの問題をあけて申めうお渡出され
用事旅居びぬる事ありとて、天氣も周囲有るお健

お父様御無事お着き遊ばしまして、(おせ牙出た)存じます。その後は大層御無沙汰申上げましたか續りて御機嫌およろしくいろいろとませ、御地はもうお暖くなりましてございやせう。こちらも大へん暖うございます
 さて昨日晩は雨がふりやしましたから今夕は大層よいお天氣でござります。
 昨日朝勝本えうをぢ様が、今晚東京をたつかぬとおしゃって、(家出で)あります。
 りました。おたしはらくふりの合志(おほえとしちゑとあぢとす様でござります)
 先だつてお見えにならずした感じ。そう時間には變なうございましたが客間に足
 もきませでした。その時お母様は十分お寢れ程をお願ひ申上ります。後で
 お母様とお姉様とはち小言をちやうだい致しましたが、
 今はこれで失礼申上ります。重お體をお大切に遊ばしませ、

御父上様

御前に

和子

よ

さよなら